

藝者

少年なりしといへり、紅顔美少年、半死白頭翁を思ひ出して、をかしと有り、

〔賤者考〕藝子江戸にて女藝者といふ、廓中の間を藝者といふ、廓

〔奴師勞之〕女藝者の事を昔はをどり子といふ、明和安永の頃より藝者といふ者など、しやれた

り、辨天おとよ新富など、いひ、橘町に名高し、妓者呼子鳥といふ小本田にし金魚作、後此二人の

事を記せり、橘町大坂や平六といへる、藥種屋の邊に藝者多し、俳諧の點者、祇徳、其邊に住しゆゑ

に、祇王祇女がほとりに、祇一祇徳などいひし白拍子の名にたぐへて、祇徳とはつきたり、辨天お

とよ追善の句に、

蛇は穴に辨天おとよ土の下

祇徳

といひしもをかし、

〔塵塚談〕歌舞妓河原者の曲藝を以て、事業とし糊口する者を、男女ともに藝者と通稱す、江戸

中に二萬人の餘、これ有よし、女を羽折といふ、親兄弟をやしなふも多し、二萬人餘の中、上手高

名なるものは、一ヶ年に束脩貳百兩程づゝも取よしなり、されど倉廩を持しものは一人もな

し、淺草邊にて、きねや庄次郎といふ者一人のよし、これは親庄次郎建し倉廩なりといふうへ

もなき賤き業にして、弟子も皆無頼放蕩もの而已の寄合なれば、くらのなきも理り也、

〔嬉遊笑覽五歌舞〕風流徒然艸に、中村勘之丞の手舞の中にて、ぶりのよき事をえらびて、ゑがほのお

かつといひける女に教へて、後に袖とめけれど、人みなをどり子とぞ云ける、おかつが妹松野と

いひける、此藝を續り、是舞子の開山なり、折ふしのはやり歌をわけて謠ふ、其後かめやの小三郎

多くのをどり子供を取たてたり、かまはらひお梅が鈴のふりもあり、水木おはるに教へけると

ぞみゆ、是かの志賀山の始なるべし、色芝居に、舞子をいふ處、水木が七ばけ、澤之丞が淺間の怨靈、

こんくわいの、鐘をどりのこ、恐らく知らぬ事なき番敷に、いかさまよき鳥のか、れかすと、此親